

明治政府が変えたもの

ファンタジー国家として明治を考える

革命成功から軍事国家へ

一般的に明治維新は文明開化という文脈で語られますが、実際のところはクーデターによる政権強奪、つまり革命政府ということになります。「王政復古」を掲げた革命というのが世界でも稀な例です。

革命国家の特徴は、理想的な国を作ろうとすることです。明治政府の場合、それは和魂洋才、二重構造となっていました。国家制度としてはプロイセンを、社会制度としては儒教を継続しました。

あるいは三重構造と言えるかもしれません。王政復古は上代を理想としていました。

国家の制度としてはプロイセン王国をケースモデルにしたと考えます。

普仏戦争でプロイセンはフランス帝国を破り、オーストリア帝国を除くドイツ統一を成し遂げます。19871年(明治4年)ドイツ帝国が誕生します。議会政治の外見を持ちつつ実際は皇帝が絶大な権限を有する国家です。

それまでの藩が地方統治を行い幕府が統括するスタイルから、政府が統一国家としての日本を統治するスタイルを目指していた明治政府は、「富国強兵」と「中央集権国家」の成立を目指し、プロイセン(ドイツ)の憲法や国家体制、建築様式などをモデルとしました。

明治政府は医学や法学、軍事など幅広い分野でドイツからお雇い外国人を招き、また政府からも人員を派遣しました。

1873年(明治6年)に「徴兵令」が發布されます。2年前に断行された廃藩置県で行き場をなくした武士は軍人になります。1870年(明治4年)に戸籍法、翌年に壬申戸籍が編製されたことも影響しています。

1873年(明治6年)の徴兵令、1889年(明治22年)の改正で国民皆兵制となりました。軍事国家が確立されたのです。

国家神道の成立

明治政府は統一した日本国としてまとめるためにアイコンが必要だと考えました。それが天皇を神格化することとなりました。

明治維新を成し遂げた尊皇攘夷論は、徳川光圀が始めた『大日本史』編纂の中で培われた水戸学の影響を強く受けています。徳川幕府が導入していた朱子学に平田篤胤の国学が取り入れられ、尊王攘夷論が出来上がります。上代を理想とし、天皇を中心とした東アジア的華夷思想が倒幕運動へと結びつきました。この思想は明治政府のイデオロギーとなりました。

尊皇思想とは、国民からの信頼、尊崇を高めること。これをさらに強固にするために行われたのが、天皇の神格化と国家宗教の創設です。

その思想を支えたものが『大日本史』であり、そこで展開される「神である天照大御神から途切れず男系男子による万世一系」という物語でした。

明治政府は祭政一致、神仏分離、大教宣布を大きな国策としました。

祭政一致とは神祇官と太政官を対等のものとする考え方ですが、西洋型の近代国家には妥当しません。神武天皇の時代に還ることを目指した王政復古は、近代国家を目指す明治政府とは相容れないものでした。

「王政復古の号令」を起草した平田国学などの活動家は政府中枢と対立することとなり、やがて地方へ追いやられます。

1868年(明治元年)に神仏分離令が発令されます。それまでの日本では神仏習合が当たり前のもので浸透していましたが、これを強引に分離します。これは全国的には廃仏毀釈を招いて貴重な文化財の多くが失われることとなりました。

また神道を国教とすることは海外から仏教などへの宗教

ファンタジーの設定として考える構造図

プロイセン	明治政府	設定上の役割
Kaiser (皇帝)	天皇陛下	神聖国家の頂点・軍の最高権威
Nobility (貴族)	華族	国家と皇帝の間の支配層
Reichstag (帝国議会)	帝国議会	君主制議会制度の形式
ルター派キリスト教	国家神道	宗教的な国民支配
軍事官僚	内務省・陸海空軍	統制と動員
プロイセン憲法	大日本憲法	権威は皇帝に、権力は国家に
イエス・キリスト (神の子)	神武天皇 (神の子孫)	宗教的シンボル

弾圧だと批判され、国内でも反発が大きく、すぐにこの方針は撤回されます。

大教宣布は、天皇が国の中心であり日本は神の国であるということ国民に教える運動で、「大教宣布の詔」を發布し国家神道の国教化を目指しました。当初は国学者、儒学者、神主が行い、のちに仏教会からも動員されますが、期待された成果があがらず立ち消えになりました。この失敗から政府は「教育勅語」による学校現場でのイデオロギー教育へと方向を転換します。

結局、政府は神道を宗教から切り離し、「国家の宗祀」として、内務省の管轄下にて制度化することになります。国家の儀式のみを担当するプロトコル専門という位置付けです。

各地の神社は天皇を頂点とする官国幣社、県社、村社、郷社などにヒエラルキー化されることとなります。宗教ではないが、天皇崇拜が国家の祭祀として事実上強制され、国民の義務となり、天皇は現人神と位置付けられるようになるのです。

個人崇拜と神武天皇

国学は、元は和歌や『古事記』『日本書紀』の研究でしたが、本居宣長によって神道にも触れるようになりました。それを継承発展させたのが平田篤胤で、後世「復古神道」と呼ばれる国粹主義思想を広めます。この平田国学の弟子たちが尊王攘夷思想にかかわっています。日本神話をそのままに、儒教や仏教に影響される前の上代が日本固有のものだと理想化した「神武天皇の時代に戻れ」（神武創業）が「王政復古の号令」で掲げられます。

天皇を中心とした体制であれば、一般的には飛鳥天平時代を連想するでしょう。しかし、そうではありませんでした。すでに体制が出来上がった時代だからです。どこにもない理想の国家を作るためには、実在さえ不明な神武天皇は都合が良かったのです。何をしても、それが新しい時代を切り開く「神武創業」だと言えます。

現実の制度としては齟齬が大きかった国学の復古主義は、『大日本史』と共通する部分がありました。それが神武天皇です。『大日本史』は神武天皇から後小松天皇までの歴史について、神武天皇からの「万世一系」という思想で書かれています。

国家を統治するアイコンとして天皇を神格化するためにも、その初代である神武天皇は偉大である必要があります。そのために江戸後期から神武天皇陵が作られはじめます。まず場所の選定から始まり 1863 年（文久 3 年）7 ヶ月かけて基礎が行われ、1897 年（明治 30 年）に完成します。1890 年（明治 23 年）には橿原神宮が創建されます。1873 年（明治 6 年）、明治政府は太陰暦から太陽暦に改暦しますが、あわせて神武天皇の即位日を定め紀元節と

いう祝日に指定します。

神武天皇の即位日は『日本書紀』に「辛酉年春正月庚辰朔（辛酉の年の春正月、庚辰の朔日）」と記載されていますが、これを紀元前 660 年だと決めて太陽暦とすり合わせて 2 月 11 日とし、日本の起源と決定しました。さらにこの日から換算する「皇紀」を日本独自の紀年方として制定しました。

神武天皇崩御日も神武天皇祭となりました。天皇誕生日を天長節に定め、元始祭、孝明天皇祭、神嘗祭、新嘗祭なども決めました。儒教的な先祖崇拜、個人崇拜を政府が決めたこととなります。

そしてこれらの祭祀を天皇が行うこととなります。現人神として祀られる存在でありつつも、国家の儀礼の一部としての祭祀を実行する人となったのです。

宮中祭祀の創設

明治までの宮中祭祀では、天皇が自ら行うのは「四方拝」「新嘗祭」で、どちらも末裔として皇祖神に「五穀豊穰」「国家安寧」「皇室弥栄」を祈るものでした。

明治政府は国家の求心力としての天皇をより強固するため、祭祀を増やし、イデオロギーによって、宮中祭祀を制度化します。たとえば新たに神武天皇やその他の祖先にあたる天皇の崩御日に祭祀を行うことにしました。宮中祭祀に祖先個人への拝礼が新設されたのです。

聖徳太子が仏教を国の宗教として認めて以来、天皇は仏教を国内に広めてきました。江戸時代まで宗派を問わず仏教界の頂点は天皇でした。天皇家は仏教に帰依しており、奈良時代から孝明天皇までご葬儀は仏式でした。御所には黒戸と呼ばれる仏間がありましたが、明治政府が皇室は神道と決めたことで、仏像や歴代天皇の位牌は京都の泉涌寺に移され

ゲーム脳の設定集

国名「帝国」国の格付けで最上位だから
頂点「皇帝」帝国には皇帝
議会「帝国議会」プロイセンにあるから
貴族「華族」律令にないネーミング
正装「洋装」海外に足並みを揃えるため
祭祀「復古主義」天皇が国の中心だった時代のものを
衣装「平安装束」大陸のものじゃなく日本オリジナルだから
詔「日本語」漢文は大陸のものだから
宗教「神道」仏教はダメ
継承「男系男子」プロイセンと同じ

ました。
仏教への信仰は取り上げられたということになります。

仏事の場合、儀式を行うのは僧侶です。
しかし明治政府によって、天皇自らがその役割をすることになりました。現人神として崇拝される対象でありながら、祖先を祀る役目も与えられたのです。明治政府による新しい儀礼の祀る人、国家神道という枠組みの中での役割です。

1872年（明治5年）に政府は皇室の正装を洋装に決定します。それは国際儀礼上、西洋のプロトコルに合わせる必要があったからです。
従来の皇室では左が上座で、向かって右に天皇、左に皇后という並び順でしたが、ここも西洋式に入れ替わるようになりました。

その一方で、唐服で行われていた祭祀や儀式は、平安装束になりました。
復古主義から陵墓も古代の様式と決められました。崩御された時は大喪の礼が行われることになり、その祭礼は上代を模したものになりました。

かつては親王宣下で後継者を天皇が決める余地がありましたが、皇室典範によって継承は皇室の手を離れ、宮中祭祀も含めた儀礼も政府の管轄下となりました。
現人神として祀られ、大元帥として崇められ、国家元首でありながら、国体の部品の一つとして政府の支配下にある存在、それが明治天皇でした。

西暦（元号）	政治・制度
1863（文久3）	神武天皇陵の造成開始
1868（明治元）	王政復古の大号令 神仏分離令
1869（明治2）	東京招魂社創建
1870（明治3）	大教宣布の詔勅
1871（明治4）	廃藩置県、戸籍法制定
1872（明治5）	皇室の正装を洋装に決定
1873（明治6）	紀元節など祝日制定 太陽暦採用・皇紀制定 徴兵令
1889（明治22）	大日本帝国憲法発布 皇室典範発布
1890（明治23）	檀原神宮創建 教育勅語発布
1897（明治30）	神武天皇陵完成
1906（明治39）	『大日本史』完成 神社合祀令

日本的儒教と形式的復古主義

日本に儒教が伝来したのは仏教と同じか少し前だと言われており、5世紀から6世紀の初頭と考えられます。「論語」「孟子」などを学ぶことが、道德經典として、また漢文のお手本として皇室や貴族階級では教養の必須科目となりました。
儒教は中国律令制度の理念思想であり、律令国家を目指す日本にとって重要でした。

次に日本に儒教が到来するのは鎌倉時代、禅僧によるものです。官僚でもあった禅僧が公家や武士の道德教育として取り入れました。

儒教においては神ではなく「天」が絶対的な存在であり、天命が重要です。個人は天命を知りそれにつとめる、その理を教えるものであり、君主は天命に背くとその地位を奪われます。王朝が変わる、つまり別の姓の王朝になるのは天命を失ったからだという考えで、これを易姓革命と言います。儒教では天命によって王朝が変わることを容認しています。

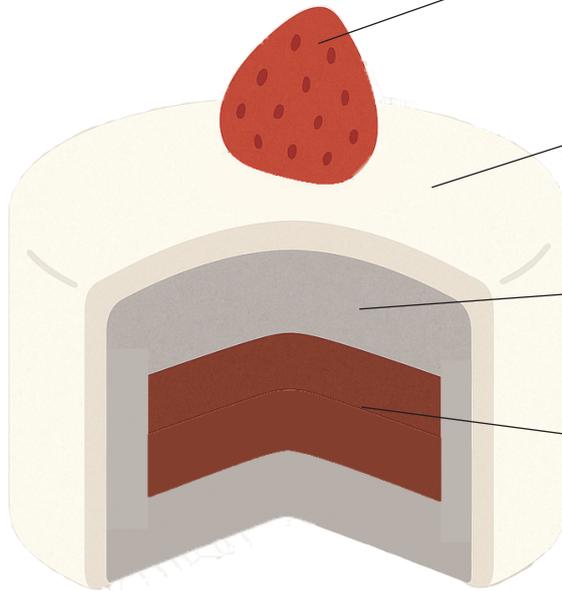
皇室は皇祖神から途切れない血統という希少価値が重要であり、易姓革命は不都合です。
これは幕府も同じでした。

戦国末期に儒教の一派の朱子学が伝来します。徳川家康は易姓革命の思想は排し、朱子が大重視した五倫「父子・君臣・夫婦・長幼・朋友」の関係を「君臣上下の身分的秩序を絶対視」と変形させて、治世のために取り入れます。本来は中央集権国家の理念を、徳川幕藩体制という封建国家で取り入れるイデオロギーとしたのです。
水戸学が取り入れたのは、この変形した朱子学です。

この易姓革命（天命）のない朱子学は、上下関係や礼節を重んじる名分論（大義名分論）となり、忠義が美德とされ、家父長制度を支え、いわゆる男尊女卑思想となっ
ていきます。
官僚制度や役職、洋装といった形式は西洋に倣った明治政府ですが、本質的な部分は、この日本的に変形した朱子学でした。

明治政府は天皇を神格化する手段として、南朝を正統とし、その武将・楠木正成を忠義の神として祀る湊川神社を建立します。つまり、忠義に殉じた人間を神に列する権限を明治政府が手にすることになったのです。あるいは神社を偉人の記念堂のようなものとししました。
1869年（明治2年）に創建された東京招魂社（10年後に靖国神社に改称）では、忠義や戦死を国が神格化することになります。
こうした個人を神として祀る方針は、のちの明治神宮や乃木神社へつながり、やがて英霊思想へと発展していくこととなります。

明治政府とはホイップクリームにつつまれた大福餅である



イチゴ

統合装置
現人神=大元帥
天皇陛下

ホイップクリーム

西洋的制度・組織
洋装・軍隊・憲法・議会・学制
建築物・インフラ・メディア

餅(求肥)

日本化した朱子学
家父長制・家制度・道徳規範
男系男子継承

あんこ

復古主義
神話的国体・宮中祭祀
国家神道・教育勅語

明治憲法の第一条に「万世一系」が記載されているように、明治政府にとっても易姓革命は許し難いものでした。つまり天命の存在しない状態です。江戸時代、庶民は寺請制度で寺院に所属しており、神仏習合で信仰生活を送っていました。明治になって寺請制度は廃止され、神仏分離令で神道が国教とされたもののその後は宗教ではなく国が管理する儀式制度となり、神社は庶民の信仰の場ではなくなりました。

お伊勢参りとして賑わっていた伊勢神宮は、1869年(明治2年)明治天皇の親拝によって敷地内の店や民家、門前の俗界が整理され、国家が管理する聖域となりました。明治天皇の親拝は「敬神崇祖」の精神を体現するものですが、それによって民衆にとっての祈りの場が、国家統治の象徴になったのです。

天命をまっとうするための規律としての儒教を、易姓革命を避けるため肝心の天命を空洞にしたまま使い、天皇を現人神に祀りあげつつ大元帥という世俗のトップも兼ねさせる。宮城(皇居)遥拝や神社参拝は国家の祭祀であり宗教ではないと言いながら、現人神への崇拝といった宗教的な側面もある二重性、この国家神道の矛盾は、そのまま明治政府の矛盾でもありました。

形式的には復古主義に見えつつ、実は国家権力による統治。天皇親政に見せつつも実際は政府が管理。宗教ではないと言いつつ国体そのものを崇拝することを国民に強いる

ことになります。

政教分離の近代国家を作ろうとしつつ、教育勅語でイデオロギーを植え付けることで、国民には神話国家の考えが行き渡り、それが在野の過激な神道思想を生み出します。

これが明治後期から昭和初期に過激な国粹主義となるのです。

結び

前のめりに全速力で遮二無二国家形成を行おうとした明治政府。西洋の諸制度を取り入れつつ、日本式朱子学と復古主義で理想国家——ファンタジー国家を作ろうとしました。

強力な中央集権国家とするために、有効と思われるあらゆることを試みました。

そして設定を盛り込みすぎて物語は破綻しました。

しかし、そこで形成された思想の残滓は、現在もまだ燻っています。

ファンタジー世界から抜けられない人たちがいます。本来、それらの設定は西洋諸国、つまり国際社会と肩を並べるためのものでした。その基本思想に立ち返る必要があるのではないのでしょうか。

現実を見つめ、現実即ち制度を、日本は求めています。